

19世紀後半における ポーランド王国繊維工業の発展

藤 井 和 夫

I

従来我国ではあまり知られることもなかったが、ロシア・プロイセン・オーストリア三国の分割支配下にあった19世紀のポーランドでは、特にロシア領のポーランド王国を中心に目覚ましい資本主義工業の発展が見られた。それを代表しているのは、ポーランドのマンチェスターと呼ばれたウッジ市を中核とするウッジ地帯の繊維工業であり、その成長は様々な意味においてポーランド王国工業の成立と発展のひとつの典型をなしていた¹⁾。

ポーランド王国における繊維工業は、資本・労働・市場等のあらゆる局面におよぶポーランド王国政府の工業育成策を最も重要な柱として、1815年の王国

-
- 1) ただし、とりあえず問題を工業部門に限定するとしても、ポーランドにおける資本主義の成立と発展を考える場合、われわれはこの国に特有の多くの複雑な問題の解決を迫られることになる。それは、後進資本主義国に共通する一般的諸問題、東欧諸国の工業化に共通するやや一般的な諸問題、そして、三分割されたまま1世紀にわたって政治的主権を失ない、しかも独立回復後も大幅な国土の移動に伴って国民経済の再形成に向け改めて多くの課題をかかえたポーランドに特殊な諸問題、さらにそれら諸問題相互の関連、として大きく整理することができる。それらについて今の段階で十分検討することはできないが、いずれにしても、ここで繊維工業を典型という時、それが、同部門がポーランド工業の中で生産額や労働者数あるいは技術革新において最も重要な部門であったということの意味するのは当然であるとしても、他方で、同部門が全体としてのポーランド資本主義の何か普遍的な性格を体現していたと主張するのではなく、むしろ上に述べたポーランドに特有な錯綜した諸問題をいくつかの重要な点で最も明確な形で示していたのがウッジ地帯を中心とする繊維工業であったということなのである。

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

成立当初からその成長を開始した¹⁾。筆者の時期区分に従えば、1815年から1864年までをその成立期、それ以降第1次世界大戦期までをその発展期と見ることができる²⁾。

本稿の課題は、これまでの繊維工業成立期に関する研究の成果を踏まえながら、その発展期の全体像を明らかにすることにある。従って、成立期以来の王国政府の工業政策が、19世紀のポーランド史における大きな変化の中で、政策主体のあり方や政策手段の内容は当然移り変ってゆくものとしても、どのような形で一貫性を保ちつつ発展期に引き継がれていったのか（あるいは引き継がれなかったのか）、そして王国政府による働きかけに大きく依存しつつ繊維工業成立期にいちおうの定着をみた移住者を中心とする個々の企業家や企業が、その後の経済的・政治的環境の中でいかなる成長を示したのか、また、ポーランド資本主義を代表するウッジ繊維工業地帯がその成立以来どのような発展と変貌をとげたのか、といった諸点を明らかにすることがこれまでの研究との関連の中で必要となろう。しかし本稿においては、そうした具体的な諸問題の実証的研究の第1段階として、王国繊維工業全体のマクロ的な動向を特に工場制工業

- 1) ポーランドにおける繊維工業の成立・発展の特色は、長期にわたる農村家内工業・手工業と近代的工場制工業の並存等の後発工業国に共通した諸現象の他、その成立の要因としての移住外国人手工業者・企業家のもつ意義の大きさ、その発展の大きな要因としてのロシア市場の存在等、ポーランドに特殊ないくつかの点を指摘することができる。特に最後の問題は、いわゆる「東方市場」問題として従来からポーランド資本主義の性格をめぐる重要な論点のひとつとして検討が重ねられてきた。この問題については我国でも最近本格的な論争の紹介と分析が開始されている（神代光朗「ポーランド王国の経済的発展をめぐる「東方市場」論争史序説(1)・(2)」、『三田学会雑誌』76巻6号・77巻5号、1984年2月・12月）。しかしポーランド資本主義工業そのものの実証分析については、我国ではほとんどなされていないのが実情であり、本稿はその方面での課題を担うささやかな試みのひとつである。
- 2) 拙稿「ポーランド王国繊維工業の成立における政府の役割」、『社会経済史学』48巻2号、昭和57年7月、43—44頁。
- 3) 前出の拙稿の他、特に拙稿「ポーランド王国における工業都市の成立」、『関西学院大学経済学研究』、10号、昭和52年12月、同「19世紀ポーランド王国の資本主義工業」、『関西学院大学経済学論究』、34巻3号、昭和55年10月、同「成立期ポーランド王国繊維工業の企業者像」、『同』、37巻3号、昭和58年12月、同「ウッジ市における繊維手工業者の入植」、『同』、38巻3号、昭和59年12月。

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

を中心に分析することに課題を限定したい。つまり個々の企業の成長やウッジ地帯の発展過程に関する具体的な実証分析の前提として、ポーランド王国全体としての大まかな繊維工業の発展を跡づけておきたいのである。¹⁾ただし、後にも述べるようにこの時代のマクロ的な数値は歴史的データとしては最も信頼のおきにくいもののひとつであり、史実の数量化の意義を十分認めつつも、それに過度に依存するあまりデータの数字が一人歩きしたりすることのないよう十分に気をつける必要がある。本稿で示されるデータによって王国繊維工業全体の流れが大きく把握できれば、ここでの分析目的は十分に達成されたと言わねばなるまい。

まず生産額と雇用労働者数の推移によって、1850年代以降のポーランド王国繊維工業の発展を追ってみよう。²⁾

II

第1表は19世紀後半のポーランド王国における繊維工業の生産額と労働者数を示したものである。³⁾また第1図は、長期的な傾向をわかりやすくするために

- 1) 従って本稿においては、各個別企業の経営や工業発展の地域的な差、あるいは工業発展の要因そのものの分析については立ち入らず、全体としての発展の成果を示すにとどめる。それらについては各々稿を改めて分析してみたい。
- 2) 発展期をいちおう1864年以降としながら本稿において1850年代からデータを示したのは、ひとつには成立期からの連続性を意識したのと、従来研究対象をウッジ地帯に限定してきたため同時期の王国全体のデータをほとんど示してこなかった点を補うためである。
- 3) ここでは工場による生産額と雇用労働者数を示しているが、表中各年の数値は必ずしも一貫した統計調査にもとづくものではなく、数種類の政府機関による公式報告、工業視察団による調査報告、研究者による集計等からなっており、その信頼度にもばらつきがある。その主たる問題点は、各年度の調査・集計が必ずしも統一基準によってなされたものではないこと(特に調査対象の範囲、工場と手工業の作業場との分類基準、各工業部門間の分類基準等の不統一性)、また企業の提出するデータが、課税等を意識して常に過小に報告されることが多かったことである。J. Łukasiewicz, *Przewrót techniczny w przemyśle Królestwa Polskiego 1852—1886*, Warszawa 1963, s. 10—11, W. Puś, *Przemysł włókienniczy w Królestwie Polskim w latach 1870—1900*, Łódź 1976, s. 80—81, K. Badziak, *Przemysł włókienniczy Królestwa Polskiego w latach 1900—1918*, Łódź 1979, s. 48. とりわけ第1表の数値のような集計を重ねることによって得られるマ

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

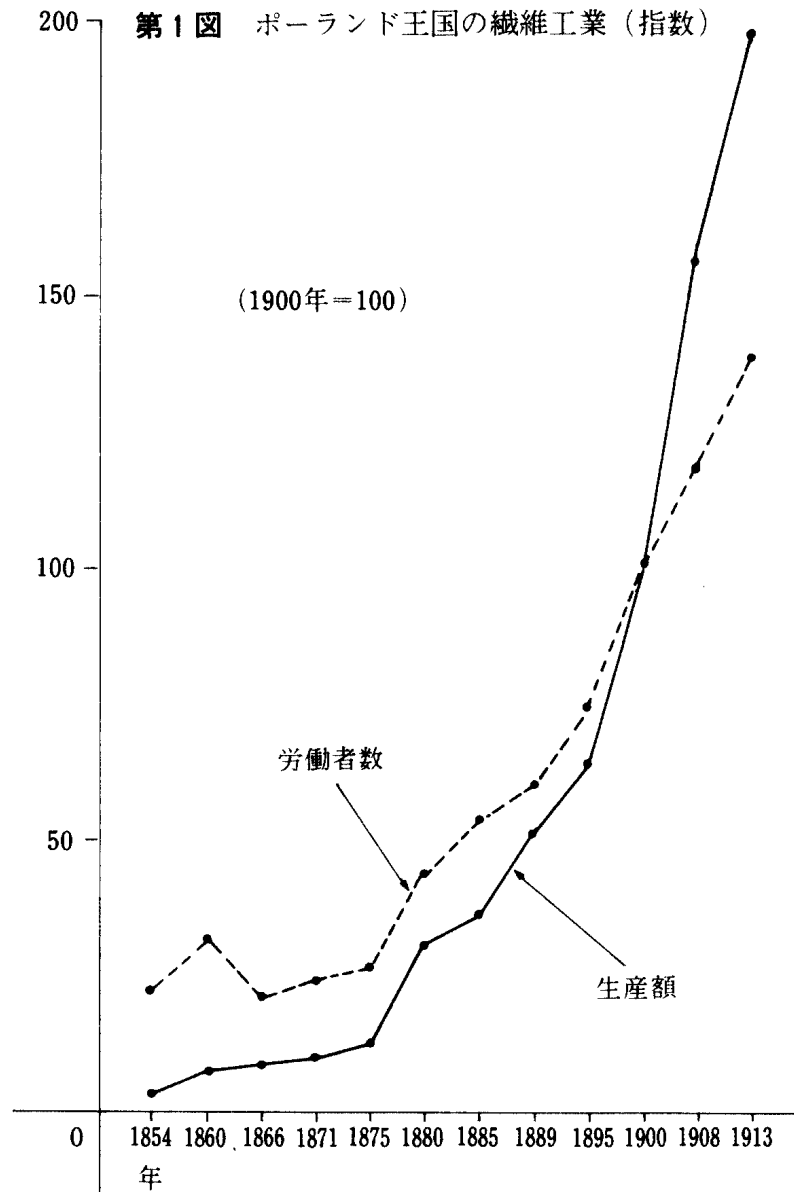
第1表 ポーランド王国の繊維工業
(千ルーブル, 人)

年	生産額	労働者	年	生産額	労働者
1854	5,544	26,501	1881	59,894	51,751
1855	6,703	27,443	1882	67,785	55,589
1857	8,626	31,034	1883	69,447	59,288
1858	9,236	31,010	1884	63,611	53,204
1859	10,267	33,494	1885	67,160	62,261
1860	13,732	36,677	1886	72,110	62,733
1861	13,647	34,131	1887	73,923	51,370
1862	10,750	28,620	1888	83,183	58,123
1863	6,904	22,308	1889	94,885	69,321
1864	10,440	25,760	1890	77,053	52,104
1866	15,443	24,191	1891	78,584	53,000
1870	15,425	20,222	1892	108,357	73,591
1871	18,131	28,097	1893	114,827	78,175
1872	18,069	28,656	1894	112,980	82,994
1873	18,534	26,229	1895	118,274	85,841
1874	20,995	28,053	1896	118,522	85,318
1875	23,265	30,529	1897	175,461	103,000
1876	23,440	33,132	1898	183,700	104,000
1877	26,209	35,583	1899	184,600	106,000
1878	46,055	43,016	1900	182,814	115,034
1879	56,747	42,937	1908	287,112	135,158
1880	57,318	51,137	1913	361,987	159,314

出所：1854—1866年は Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 126, 205, 1870—1900年は Puś, *op. cit.*, s. 83, 1908・1913年は Badziak, *op. cit.*, s. 50 による。

クロのデータは、一層その信頼性が問題となるが、長期間の大きな動向を知る上では十分意味のあるものと考えられる。なお同一年について複数のデータが存在する場合、最も数字に食い違いの少ないのは生産額であり、次いで労働者数であるが、データに大きな開きのある工場数についてはここでははぶいた。Puś, *op. cit.*, s. 81.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展



第1表のいくつかの年の数値をそのまま指数化し（1900年＝100）、グラフに描いたものである¹⁾。第1図からすぐわかるように、19世紀後半のポーランド王国では急激な繊維工業の発展が見られた。その成長の度合いは、雇用労働者数におけるよりも生産額における方が一層著しい。そのことは、ひとつには繊維工

1) あえて平均したりせずほぼ5年ごとのデータを指数化しているが、不況等の影響でやや極端な動きが出るのを避けるため、任意に年を選択している。また1900年を基準年にしたことに特に大きな意味はない。

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

業において後述のように技術革新が進んだ結果、次第に労働生産性が高まったことを示している。他方で、生産額の増加を示す数字にはこの時代の物価変動の影響が現われていると考えなければならない¹⁾。しかし今のところ当時の物価上昇率を正確に把握するだけの材料と準備に欠けるため、本稿においては当面物価変動を考慮の外において分析を続けたい。

さらに第1図からは、この期間の繊維工業の発展に、1880年頃を境として明確な2つの趨勢を読み取ることができる。そして第1表からはその転換点が1877—78年にあることがわかる。表の数字を信頼すれば、1878年には生産額においても労働者数においてもその前年までと比べて飛躍的な増加が見られるし、それ以降の発展のテンポは以前の時期と比べて明らかに様相を異にしている。

この大きな変化は、1877年のロシア政府による金関税の導入がもたらしたものであった²⁾。この保護関税政策によって、すでに1851年にロシアの関税境界内に組み入れられていたポーランド王国の繊維工業は全く新しい経済環境の下に置かれることになった。すなわち、イギリスやプロイセンとの競争から守られながら王国の繊維製品は大量にロシア市場に流れ込むことが可能になり、その結果が生産額や労働者数の急増に示された王国繊維工業の目覚ましい発展となったのである³⁾。

- 1) 特に20世紀初頭の時期は、繊維原料・半製品・賃金・化学薬品の諸物価上昇の影響が大きいと言われている (Badziak, *op. cit.*, s. 48—49.)。しかし、たとえば羊毛価格について逆の傾向を示すデータもあり、ここでは確かな断定を下すことができない。また物価変動のゆえに生産額よりもむしろ雇用労働者数の方が繊維工業発展のダイナミズムをよりよく示しているという意見もあるが (*ibid.*, s. 49), これも先述の労働生産性上昇の影響や、生産額と比べた労働者のデータの信頼性の点からどちらとも言えない。
- 2) それは国内工業の保護を目的とした事実上の大幅な関税引き上げであり、ロシア領内から西欧とりわけプロイセンの繊維製品を締め出して、やがてロシアとプロイセンとの間にいわゆる関税戦争を引き起こす結果となった。それがポーランド王国の繊維工業の発展に対して有する意味は見られるように極めて重要であるが、その詳細については繊維工業発展の要因を分析する別稿にゆずりたい。
- 3) かくてポーランド王国工業の発展に対する前述のロシア市場 (あるいは極東を含めた東方市場) の役割というものが大きくクローズ・アップされることになるが、その際、

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

いずれにしても第1表によれば、1854年の段階と比べて、生産額では1866年に2.8倍、1878年8.3倍、1900年33.0倍、1913年65.3倍と驚くべき増加を示し、また労働者数についても1878年1.6倍、1900年4.3倍、1913年6.0倍と大きく増えている。ポーランド王国の繊維工業は、半世紀の間に飛躍的な成長を遂げたのであった。

ところで、いずれの国においても工業が発展するにつれて資本主義に特有の景気循環が現われるようになる。ポーランド王国もその例外ではなく、この時期に第1表からもうかがわれるようないくつかの景気の変動を経験した。特に王国の繊維工業はその市場構造の性格から、直接・間接に（つまりロシア市況を通じて）世界の景気循環の影響を受けやすかった¹⁾。繊維工業の中でも部門によって景気循環の時期や影響の大きさに差があるが、全体として見ると次のような景気の変動（ここでは不況の波を示す）が見られる。

まず1861—65年には、アメリカ南北戦争による世界の棉花飢饉の影響で王国繊維工業にも不況が訪れた²⁾。次いで1872—76年には、ロシアの不作（1871年）と世界恐慌のために王国繊維工業は不況となり、前半には羊毛紡績が、後半には綿織物が特に大きな影響をうけた³⁾。しかしそのダメージは西欧諸国と比べるとまだ小さなものであり、その回復は前述の関税政策の影響もあって西欧諸国

金関税導入の翌年からすぐに生産と雇用の増加が始まった事実に注目する必要がある。つまり1878年以降の繊維工業の急激な発展は、それ以前にすでに準備されていた潜在的な成長力をこの保護関税政策が顕在化されたことを示しているのであり、その意味でむしろそれ以前に整えられた成長の条件が重要となる。つまり、1877年の金関税がもたらしたロシア市場の意義は、重要なものではあっても多くの複合的な発展要因の中のひとつと考えるべきなのであって、第1表や第1図に示された発展のデータにもかかわらずポーランド王国において農奴解放の行なわれた1864年をもって繊維工業の成立期と発展期の画期と考えるのも、そうした理由にもとづいている。この点については、王国の国内市場の意義や本稿でその大まかな全体像が示される技術革新の評価等を含めて、さらに別稿で検討してみたい。

- 1) Puś, *op. cit.*, s. 84—85.
- 2) *Ibid.*, s. 87.
- 3) *Ibid.*, s. 89—90.
- 4) Ż. Kormanowa i I. Pietrzak-Pawłowska (red.), *Historia Polski*, Tom III, Cz. I, Warszawa 1967, s. 382.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

よりも早かった¹⁾。次に1881—86年にはやはり世界の不況がロシアを通じて王国に及び、まず羊毛工業が大きな打撃を受け(1881—84年)、ロシア市況の回復に伴ってそれが立ち直ると、今度は綿工業が不況に陥った(1885—86年)²⁾。王国繊維工業が初めて本格的に世界恐慌の波に呑み込まれたのである。ただ、国外の市場にあまり依存しない麻工業は、ほとんど景気の停滞を示さなかった³⁾。1890—93年になると再びロシアの不況がポーランド王国に及び、羊毛の関税引き上げ(1889年)と王国に不利な鉄道運賃の改訂(1890年)の影響も加わって、まず羊毛工業が、次いで軽度ではあったが綿工業と麻工業がそれぞれ不況に陥った⁴⁾。しかしいずれも不況の期間は短かく、技術面・組織面でロシア工業に優る王国繊維工業は、安価な繊維製品を生産の主力としつつあったことも幸いして、ロシアにおけるよりもよほど急速な景気の回復を実現した⁵⁾。1899年に世界に先駆けてロシア経済が停滞すると、また王国繊維工業も不況期を迎えた⁶⁾。しかも今回は、特に綿工業が綿糸価格や一部の綿織物価格の下落の痛手から十分には回復しきれぬうちに日露戦争による不況に再度突入し、王国繊維工業は需要不足・原料および製品の輸送困難・金融逼迫に悩まされたのであった⁷⁾。その後王国の繊維工業は1908—09年と1911—13年の2度の不況を経験している⁸⁾。

もちろん以上のような不況の波の合間には好況期が存在し、そうした景気変動を経ながら第1図のような繊維工業の発展が実現されたのである。そしてこの景気の循環はその過程で、後述のように大企業による生産の集中・技術革新の進展・生產品目の構成変化を生みだしたのであった。

1) Puś, *op. cit.*, s. 92.

2) *Ibid.*, s. 92—97.

3) Historia Polski, III - I, s. 382.

4) Puś, *op. cit.*, s. 96.

5) *Ibid.*, s. 97—100.

6) *Ibid.*, s. 99.

7) Badziak, *op. cit.*, s. 30—34.

8) *Ibid.*, s. 34—35.

9) *Ibid.*, s. 40—42, 45—47.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

Ⅲ

このようにポーランド王国の繊維工業は19世紀の後半を通じて、変動を伴いながらも全体としては着実にダイナミックな発展を遂げたのであるが、では当時繊維工業は王国工業全体の中でどのような地位を占めていたのであろうか。

第2表は1850—80年のポーランド王国全工業の生産額および労働者数と、その中での繊維工業のウェイトを示したものである。前述のような事情から、王

第2表 ポーランド王国工業の発展

年	生産額(千ルーブル)	労働者 (人)
1850	11,286 (47.2%)	50,066 (48.0%)
1857	22,158 (38.9)	56,364 (55.1)
1860	33,822 (40.6)	74,622 (49.2)
1866	52,721 (29.3)	69,182 (35.0)
1870	61,869 (24.9)	67,595 (29.9)
1875	97,332 (23.9)	85,614 (35.7)
1880	171,414 (33.4)	118,831 (43.0)

() 内は繊維工業の割合

出所：Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 13, 172, 309. ただし1857年以降の繊維工業の割合は第1表にもとづいて算出した。なお1850年の繊維工業の割合には麻工業を含まず、また1857年と1860年の繊維工業労働者は政府所有工場の労働者数を除いている。

国工業全体のデータというものの信頼性にはかなり問題があり、その中での繊維工業の割合の変動の意味を今評価することはできないが、少なくとも王国工業に対してもつその相対的な重要性についてはこの表からも確認することができるであろう。ポーランド王国の資本主義工業は、消費財生産部門を中心に確立・発展したのであり、1885年の段階で繊維工業と製糖工業だけで全工業生産の半分を占めていたといわれ、その状態は19世紀の末に至るまで変らなかった。¹⁾²⁾

1) Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 385, Historia Polski, III - I, s. 397.

2) Historia Polski, III - I, s. 538.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

また労働者数について言えば、繊維工業は1900年に王国全工業の45.9%、1913年には45.6%を占め、第1位の地位を守っていたのである。¹⁾

次に、ロシア帝国の中での王国繊維工業の地位はどのようなものであったのだろうか。第3表はロシア帝国（ただしヨーロッパ部分50州）における繊維工業の発展とその中での王国工業の地位を示したものである。ここでもやはりデー

第3表 ロシア帝国繊維工業の発展

年	生産額（千ルーブル）		労働者（人）	
	ロシア	ポーランド王国	ロシア	ポーランド王国
1870	209,300	15,425（7.3%）	272,395	20,222（7.4%）
1880	328,600	57,318（17.4）	334,917	51,137（15.2）
1890	373,800	77,053（20.6）	385,416	52,104（13.4）
1900	660,310	182,814（27.6）	560,245	115,034（20.5）

ここでロシアは、ロシア帝国のヨーロッパ部分50州をさす。

（ ）内は上記中に占めるポーランド王国の割合。

出所：Puś, *op. cit.*, s. 106.

タの信頼性についての留意が必要であるが、19世紀末30年間に王国繊維工業の相対的重要性が増している事実は疑い得ない。表によれば、この期間にロシア帝国全体の繊維工業は生産額で3倍、労働者数で2倍に増えているのに対し、王国のそれはそれぞれ12倍、6倍に増加している。その結果王国繊維工業の占める地位は急速に高まることになった。果してこの数字がどれだけ正確に事実を示しているのかは少し問題があるが、それにしてもロシアの繊維工業に対するポーランド王国繊維工業の優位性は明白である。ただし20世紀になると、その生産額が占める割合は1908年で20.2%、1912年17.5%と少し低下する。²⁾しかし領土や人口比を考えてみれば、相変わらず高い優位性を維持し続けたと言えるであろう。

さらに他の諸国と比較すればどうであろうか。西欧諸国における繊維工業の

1) Badziak, *op. cit.*, s. 52.

2) *Ibid.*, s. 53.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第4表 各国の原棉消費量 (t)

年	ポーランド王国	イギリス	ドイツ	フランス	ロシア
1870	3,000	488,050	80,900	59,000	45,864
1871	3,459	547,978	112,200	99,000	68,796
1872	3,000	533,450	111,000	80,000	58,968
1873	2,900	565,230	117,800	55,000	57,330
1874	3,800	579,758	126,800	94,000	76,986
1875	6,000	557,512	114,200	101,000	85,176
1876	6,900	581,120	135,000	103,000	76,986
1877	6,500	558,420	116,700	85,000	72,072
1878	11,100	541,168	111,100	80,000	117,936
1879	21,000	522,100	123,300	90,000	106,470
1880	18,300	617,894	136,700	89,000	93,366
1881	29,200	649,220	139,300	109,000	149,058
1882	25,000	661,932	138,400	111,000	127,764
1883	28,600	692,804	168,500	116,000	145,782
1884	23,700	672,374	159,500	97,000	121,212
1885	24,400	589,292	156,000	108,000	124,488
1886	33,600	658,300	160,300	111,000	137,592
1887	38,136	600,540	192,900	121,000	185,094
1888	38,136	692,350	182,200	95,000	137,592
1889	35,000	710,056	230,700	124,000	170,352
1890	12,181	755,456	233,000	125,000	135,954
1891	36,900	756,364	245,200	154,000	152,334
1892	38,000	702,792	229,800	179,000	162,162
1893	41,200	651,036	238,800	138,000	186,732
1894	49,300	727,762	264,700	160,000	190,008
1895	36,134	755,456	283,400	141,000	201,474
1896	45,285	743,192	256,600	134,000	224,406
1897	46,800	734,572	287,900	189,000	224,406
1898	48,064	799,494	343,400	176,000	232,596
1899	48,927	799,948	316,300	175,000	263,718
1900	46,683	788,595	307,500	159,000	262,080

出所：Puś, *op. cit.*, s. 102—103.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第5表 1人当りの原棉消費量 (kg)

年	ポーランド王国	イギリス	アメリカ	ドイツ	フランス	ロシア
1870	0.50	17.39	5.61	2.87	—	0.54
1880	4.03	18.60	8.58	3.06	2.89	0.95
1890	4.46	20.06	8.36	4.71	4.02	1.15
1900	5.25	19.00	11.07	5.54	4.08	1.97

出所：Puś, *op. cit.*, s. 104.

発展と比べてみるのは適当な比較データがないためなかなか困難であるが、たとえば各国の原棉消費量を見ると第4表のようになる。また第5表は同じく1人当りの原棉消費量を示したものである。第4表によると、王国の原棉消費量は絶対量で見れば他の諸国と比較にならぬほど少量でしかないが、その消費の増加率は大きく他の国を引き離している。この30年間に王国の原棉消費量は16倍に増えているのに、イギリスのそれは1.6倍、ドイツは3.8倍、フランスは2.7倍、ロシアは5.7倍の増加でしかない。その結果、1870年にイギリスの163分の1であった王国の原棉消費量は、1900年には17分の1の量にまで接近している。同様にドイツに対しては27分の1から7分の1へ、フランスには20分の1から3分の1へ、ロシアには15分の1から6分の1へ、そして表にはないがアメリカには75分の1から18分の1へとそれぞれ相対的な消費量を増加させている。つまり原棉消費量から見るかぎり、ポーランド王国繊維工業（少なくとも綿工業）のこの30年間の発展は、同時期の他の諸国には見られぬほど急激なものであった。また成長率ばかりでなく原棉消費の絶対量についても、人口の差を考慮に入れるならばそれぞれ第5表のようになり、すでに1880年に、イギリスやアメリカには及ばぬもののドイツと肩を並べフランスを凌駕するに至っている。このことから、ポーランド繊維工業の相対的な地位は、この時期にかなり高いものになっていたとすることができる。¹⁾

1) なお20世紀に入ってからと同様の比較データを今示すことはできないが、1914年に稼働中の王国の織機数は、全世界のその1.1%を占めるとの指摘がある。Ibid., s. 55.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

IV

以上でポーランド王国繊維工業全体の展望をいちおう終えることにして、次に綿・羊毛・麻の繊維工業各部門の発展について見てゆくことにしよう。

第6表は綿工業における生産額と労働者数を示したものである。見られるよ

第6表 綿工業の発展

(千ルーブル, 人)

年	生産額	労働者	年	生産額	労働者
1854	2,730	10,400	1880	30,636	19,371
1855	3,347	11,400	1881	33,581	22,782
1856	2,853	9,283	1882	40,333	24,188
1857	4,682	14,387	1883	42,178	27,161
1858	5,440	14,703	1884	44,902	26,941
1860	8,091	17,044	1885	41,885	31,433
1862	5,264	17,125	1886	37,861	28,286
1863	2,629	9,471	1887	39,394	23,774
1864	4,184	11,867	1888	42,627	26,116
1865	5,010	12,725	1889	45,685	30,144
1866	6,099	9,578	1890	41,022	25,613
1867	8,157	11,763	1891	48,000	26,000
1869	8,132	13,387	1892	57,258	30,925
1870	10,200	13,605	1893	57,327	30,713
1871	10,433	14,000	1894	47,622	30,165
1872	11,870	14,000	1895	47,682	30,442
1873	12,215	13,000	1896	49,820	31,598
1874	11,675	13,443	1897	74,000	43,644
1875	12,820	15,375	1898	77,000	44,000
1876	11,506	15,006	1899	78,000	44,990
1877	10,999	14,439	1900	79,086	48,733
1878	26,334	19,331	1908	102,253	52,642
1879	32,313	18,849	1913	132,269	61,988

出所：1854—1866年は Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 111, 180, 1870—1900年は Puś, *op. cit.*, s. 88, 1908・1913年は Ba-dziak, *op. cit.*, s. 50 による。

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

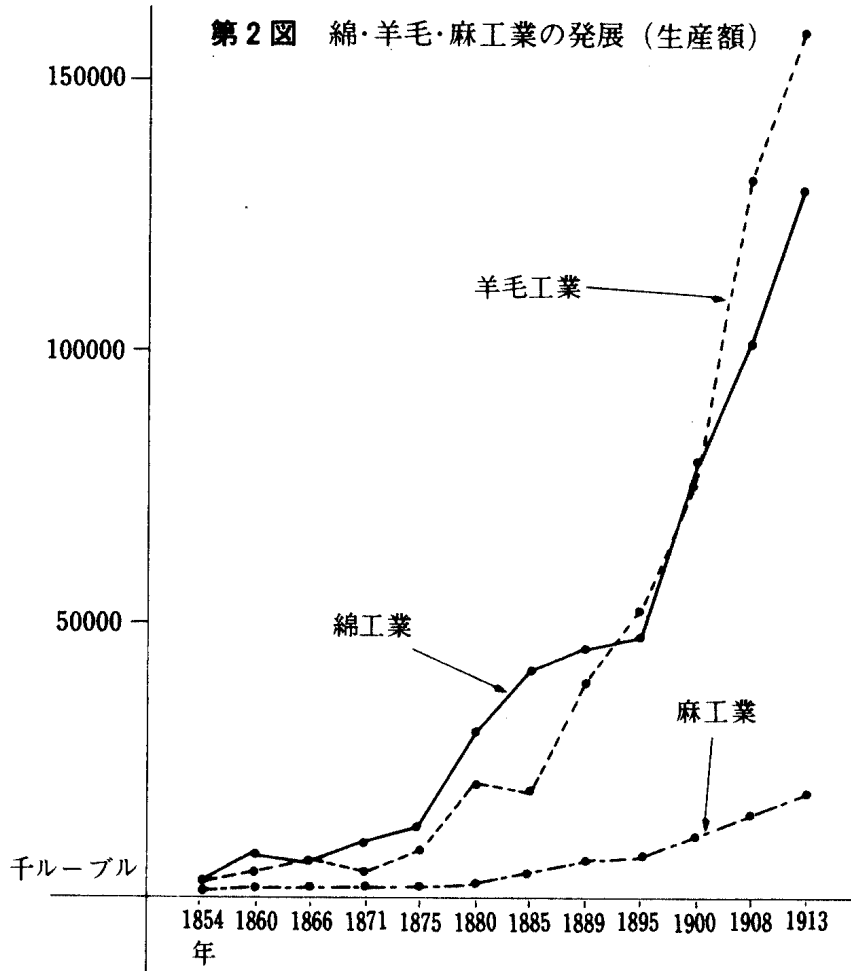
うにこの期間に生産額で48.5倍、雇用労働者数で6.0倍増加している¹⁾。その発展は、前出の第1図と同じ年について各部門の生産額を示した第2図からもうかがうことができる。ここでもデータの信頼性の問題と物価水準の問題が残されているが、特に19世紀末から20世紀にかけて綿工業に急激な成長があったことは明白であろう。

綿工業の場合、第6表から知られるように、すでに1860年に成長のひとつのピークに達している。綿工業は1840年代半ばに、停滞した羊毛工業に代って王国繊維工業の主力部門となり²⁾、1860年まではほぼ順調な成長過程を辿った。ところが前述の1861—64年の棉花飢饉による不況期に大きな打撃を受け、1860年代末までに回復しなかった。その後わずかな成長はあったものの停滞が続き、1877年の金関税の導入によってようやく飛躍期を迎えたのであった。しかし1880年代半ばと90年代半ばの不況期には再び成長のテンポがにぶり、生産額においては羊毛工業に再度追いつかれ追い越されている。1890年代末からは後述の大企業を中心に急速な発展を遂げることができた。

ポーランド王国の綿工業は、1850年代の初めにはその原料を棉花あるいは綿糸の形で、主としてドイツ商人を通してアメリカから手に入れていた³⁾。第7表はその輸入額を示したものであるが、1860年まで成長過程にあった綿工業は急激に棉花輸入量を増やしている。一方原料としての綿糸の輸入はそれほど増加しておらず⁴⁾、王国内での綿紡績業の発展を裏づけている。1845年に国内綿糸は

- 1) 生産額に比して労働者数の増加が極端に少ないが、おそらく初期の労働者数の集計に手工業者の一部が含まれる等の原因によるものであろう。
- 2) 拙稿「ポーランド王国繊維工業の成立における政府の役割」(前出)、25—26頁。
- 3) Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 35.
- 4) 1864年のポーランド王国の輸入総額が1851年と比べて940万ルーブルから1,850万ルーブルへと倍増しているのに、綿糸と綿織物を合わせた輸入額が40万ルーブルから41万ルーブルへと全く増加していない事実も、当時の綿工業の不況を考慮に入れても、この綿糸輸入の停滞傾向がその後も続いたことを示している (Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 170)。しかし1851年に改訂された関税率は、輸入棉花が1プード当り25コペイカと低いのに対して、綿糸のそれは染色されていないものが1プード当り5ルーブルあるいは価格の3分の1、染色糸が1プード当り6ルーブルと高率であったため、公式の通関記録に表われない綿糸の密輸がおそらくかなり存在したであろうと考えられる。従ってこの綿糸輸入額は相当過小評価されている可能性がある (*ibid.*, s. 35—36)。

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展



第7表 棉花・綿製品の輸入 (千ルーブル)

年	棉花	綿糸	綿織物
1845	318.0	363.0	80.0
1849	352.2	388.9	109.6
1850	391.0	268.0	119.0
1851	470.2	402.6	

出所：Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 36.

王国綿工業の需要の17%を供給していたが、1853年には約50%の需要を満たしていた¹⁾。ただし1857年に綿糸の関税が下がったため（1ブード当り白糸3.5ルーブル、染糸5ルーブル）国内綿糸のシェアはその後急激には上昇せず、王国綿織物が

1) *Ibid.*, s. 35.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

専ら国内綿糸によって生産されるようになるのは1870年代の初めに至ってからである。¹⁾

19世紀の後半における綿工業の急激な成長には、後述する大企業による生産の集中（中小企業の駆逐）や技術革新＝機械化と並んで、生產品目の変更と多様化が密接に関連していた。特に1880年代以降、綿紡績に新しい生産分野が加わった。それはビクーニャ綿糸（染色棉花に数%の羊毛あるいは低品位の染めてない棉花か漂白麻糸くずを混ぜて羊毛紡績機で生産する²⁾）と再生綿糸である。これらの製品は、次第に生産の割合が増加した低質の安価な綿織物とともに³⁾、当時の大衆的な需要に適合しており、繰り返す不況の中で王国内でもロシアでも比較的⁴⁾に販路を見出しやすかったのである。

次に羊毛工業の発展を見てみよう。第8表を見ると1854年から1913年の間にこの部門では生産額で78.8倍、労働者数で7.8倍の成長が見られた⁵⁾。また先の第2図からは1880年代の半ば以降に急激な成長のあったことが知られる。

羊毛工業は有利な関税環境の下にすでに1820年代から、マニファクチュアとしてではあったが生産の拡大が見られた⁶⁾。それが1830年以降関税事情が一変すると長い間成長は停滞し、1820年代末の生産水準を越えるのはようやく1870年代に入ってからであった⁷⁾。しかし金関税の導入以降も前述のように1880年代前半の不況の痛手が大きく、飛躍的な成長が見られたのは80年代後半から後のことである。その時期になると大企業への集中や技術革新⁸⁾、それに梳毛紡績と

1) *Ibid.*, s. 104, 174.

2) *Ibid.*, s. 315, Puś, *op. cit.*, s. 39.

3) 1886年にはその全綿織物生産の中での割合は35%であった。Puś, *op. cit.*, s. 96.

4) *Ibid.*, s. 96.

5) 表から明らかなように、1867年以前と1870年以後の労働者数に集計上の不統一があるため労働者数の増加率が極端に小さくなっている。

6) 前掲拙稿, 24—26頁。

7) Łukasiwicz, *op. cit.*, s. 184. もちろんその後の発展は以前とは異なって工業制工業の進展によるものである。

8) 羊毛工業の場合、綿工業とは異なって機械化は単独商品を生産する単純大規模企業を成長させた。Puś, *op. cit.*, s. 52.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第8表 羊毛工業の発展

(千ルーブル, 人)

年	生産額	労働者	年	生産額	労働者
1854	2,045	7,781	1881	18,597	10,461
1855	2,455	8,012	1882	21,284	11,359
1856	2,634	8,349	1883	20,138	11,403
1857	2,977	8,257	1884	13,198	8,375
1858	3,050	7,906	1885	19,149	11,988
1860	4,355	9,901	1886	28,671	17,165
1862	5,365	8,571	1887	27,945	17,548
1863	3,889	7,185	1888	31,068	20,395
1864	5,490	8,274	1889	39,074	25,129
1865	6,319	8,290	1890	30,001	21,163
1866	7,134	7,579	1891	34,000	22,000
1867	7,100	8,700	1892	39,640	26,962
1870	4,000	4,152	1893	43,506	27,567
1871	4,300	5,600	1894	49,362	33,310
1872	3,800	4,800	1895	52,973	34,253
1873	4,695	4,463	1896	50,224	33,007
1874	7,803	5,930	1897	72,000	37,000
1875	8,340	5,928	1898	75,000	38,000
1876	9,014	6,778	1899	77,000	38,000
1877	11,451	7,879	1900	75,855	40,874
1878	15,403	9,406	1908	132,898	50,801
1879	20,580	11,376	1913	161,057	60,476
1880	21,349	12,529			

出所：1854—1867年は Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 118, 193, 1870—1900年は Puś, *op. cit.*, s. 86, 1908・1913年は Ba-dziak, *op. cit.*, s. 50 による。

1) いう新分野に大工場が次々と建設されたことが原因となって、綿工業をも凌ぐ発展が見られたのであった。

- 1) *Ibid.*, s. 46—47, 52. 特にこの分野へは外資系の企業が多く参入した。それまでポーランド王国は梳毛糸を西欧から輸入して羊毛製品を主にロシアへ輸出していたのであるが (Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 34), この時期に国内産羊毛に代って西欧から梳毛用の羊毛を輸入し、梳毛糸を自ら生産するようになった。Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 345.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

最後に第9表および前出の第2図によって麻工業を見てみると、ここでもやはり緩慢ながら着実な成長が見出せる。麻製品はポーランドで最も伝統的な衣料品であり、古くから手工業として広く生産が行われていたが、工業としての本格的な発展が開始されるのは1850年代末にジラルドゥフの麻工場が拡張されてから後のことであった。

第9表 麻工業の発展
(千ルーブル, 人)

年	生産額	労働者	年	生産額	労働者
1854	723	7,231	1883	3,500	8,000
1855	857	7,928	1884	3,735	8,100
1857	912	7,302	1885	4,388	8,400
1858	1,088	—	1886	4,515	8,700
1860	1247	9,663	1887	4,800	8,300
1862	676	5,752	1888	6,159	8,468
1864	705	5,527	1889	6,217	8,700
1865	1,095	5,227	1890	6,500	7,300
1870	1,300	2,491	1891	5,908	7,400
1871	1,200	2,500	1892	6,800	8,000
1872	1,360	3,000	1893	7,345	9,185
1873	1,506	3,022	1894	6,800	9,795
1874	1,488	2,922	1895	7,546	10,352
1875	1,486	3,300	1896	7,470	9,911
1876	1,570	3,450	1897	9,643	9,800
1877	1,599	3,730	1898	11,000	10,400
1878	1,800	4,800	1899	11,000	10,600
1879	2,265	5,307	1900	11,391	12,448
1880	2,204	5,014	1908	15,270	12,288
1881	2,406	6,200	1913	19,131	13,125
1882	3,015	7,348			

出所：1854—1865年は Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 124, 1870—1900年は Puś, *op. cit.*, s. 87, 1908・1913年は Ba-dziak, *op. cit.*, s. 50 による。

1) しかしすでに1840年代から麻よりも安価な綿織物が一般に使用されるようになったとも言われている。Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 20.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

ところで綿工業でも羊毛工業でもある程度言えることであるが、特に麻工業においては、ずっと後の時期になっても工場制以外の形態による繊維生産がかなり広く行なわれていた¹⁾。第10表は1870年に麻織物がどのような形態で生産されていたかを示している。工場はひとつだけで（ジラルドゥフ）、確かにそのウェイトも大きい²⁾が、手工業と特に139,295台の織機を有する農村の家内工業の重要性はまだ極めて大きい。農民による生産はそのほとんどが自己消費用のもので、わずか4分の1が地方市場で販売されたにすぎないとしても、やはり工場製品に対して国内市場を狭めていたことは確かである³⁾。1878年になっても毛織物と麻織物を合わせて全生産の35.9%を工場が担っていたのに対して、手工業が17.0%、農村家内工業が47.1%を占めていた⁴⁾。工場が麻製品と羊毛製品の生産において首位を占めるようになるのはようやく1880年代のことである⁵⁾。手工業もそのテンポは工場よりも遅いとはいえ、生産部門からサービス部門へと少しずつ重心を移しながら成長を続けており、その重要性は20世紀になるまで変らなかった⁵⁾。このように手工業や家内工業が長期にわたって工場製工業と並

第10表 1870年の麻織物生産

	雇用数(人)	生産量(千メートル)	生産額(千ルーブル)
工場	2,000	3,734 (30%)	1,100 (36%)
マニファクチュア	491	666 (5)	200 (7)
手工業	2,864	2,105 (17)	550 (18)
農村家内工業		5,814 (47)	1,200 (39)
計		12,320 (100)	3,050 (100)

出所：Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 201.

- 1) むしろ長期間にわたって工業と手工業が並存していた事実こそ、後進資本主義国としてのポーランド（王国）の特色をなすものであろう。W. Kula, *Kształtowanie się kapitalizmu w Polsce*, Warszawa 1955, s. 93—95.
- 2) Puś, *op. cit.*, s. 58—59.
- 3) *Ibid.*, s. 58.
- 4) *Ibid.*, s. 58.
- 5) *Historia Polski*, III - I, s. 399.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

存しえたひとつの理由は、低賃金で労働力を確保でき、不況期の雇用調整が容易であって、しかもその生産高を公的に補足するのが困難であるため利潤に対する課税を免かれやすいという理由から、各企業が手工業や家内工業を利用して *nakład* と呼ばれる問屋制下請生産を工場での生産と並行して盛んに行なったからである。¹⁾

V

さて次に、ポーランド王国繊維工業発展のひとつの大きな要因となった技術革新について見ておこう。ポーランド王国における工業の機械化は1870年代から80年代にかけて進展したが、中でも繊維工業での技術革新が大きな役割を果たした。第11表はポーランド王国における蒸気機関の設置状況を示しているが、この24年間に台数で3.6倍、馬力数で13.5倍と、著しく増加していることがわかる。当初は製糖業を中心とする食品工業で台数の3分の2、馬力数の2分の1が用いられていた。しかしそのウェイトは次第に低下して、代って繊維工業が蒸気機関の使用でも重要な地位を占めるようになった。この間に馬力数で30倍に増加し、王国工業が使用する蒸気馬力数の過半を占めるに至っている。特

第11表 蒸気機関の普及

工業部門	1864年		1875/1878年		1888年	
	台	馬力 (%)	台	馬力 (%)	台	馬力 (%)
繊維	49	851 (23)	88	4,220 (29)	294	25,833 (51)
製鉄	18	229 (6)	49	1,803 (12)	139	10,294 (20)
金属	22	231 (6)	43	521 (4)	153	3,422 (7)
食品	224	1,820 (49)	484	5,846 (40)	460	6,501 (13)
その他	44	619 (17)	143	2,237 (15)	256	4,580 (9)
計	357	3,746 (100)	807	14,627 (100)	1,302	50,630 (100)

出所：1864年は *Historia Polski*, III - I. s. 397, 1875/78年と1888年は *Łukasiewicz, op. cit.*, s. 384, 398 による。

1) *Puś.*, *op. cit.*, s. 60—62.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第12表 繊維工業の蒸気機関

	1854年		1865年			1875年			1900年
	工場	馬力	工場	台	馬力	工場	台	馬力	馬力
綿	9	436	27	29	479	21	24	1,767	50,836
羊毛	8	121	11	11	228	38	41	1,216	26,848
麻	1	40	1	4	99	1	6	1,000	7,792

- ・工場とは蒸気機関を設置した工場数である。
- ・1900年の麻にはその他の繊維部門を含む。

出所：1854・1865・1875年は Łukasiewicz, *op. cit.*, s. 169, 204, 1900年は Puś, *op. cit.*, s. 12 による。

に蒸気機関1台当りの馬力数では、1864年の17馬力から1888年には88馬力へと上昇し（共に王国工業の中では第1位）、繊維工業が比較的的大型の蒸気機関を急速に導入していったことを示している。¹⁾

繊維工業の中では綿工業部門の機械化の進展が最も著しく、次いで羊毛工業、麻工業の順であった。第12表によれば、綿工業はすでに1850年代から他の部門よりも多くの蒸気機関を使用し、1865年から75年にかけても1台あたりの馬力数を増やしながら（17馬力→74馬力）蒸気力の利用を拡大し、さらに1900年には1875年と比べて28倍も馬力数を増加させている。²⁾ 次いで羊毛工業もこの間に蒸気機関の使用を大きく拡大させた。麻工業の場合には、全体としての馬力数は他の部門に及ばぬとしても、ジラルドゥフの唯一の麻工場がいかに巨大かつ近代化されたものであるということを如実に物語っている。

以上のように繊維工業において蒸気機関の設置が進んだ結果、労解者1人当りの馬力数は1875年0.13馬力、1885年0.32馬力、1890年0.51馬力、1900年0.77

- 1) Historia Polski, III - I, s. 397. なお他の部門では1864から1888年の間に1台当り食品で8から14, 製鉄で12から74, 金属で11から22へと馬力数を増やしている。繊維に次いで製鉄業での蒸気機関の並及が著しい。
- 2) 綿工業の中でも特に綿紡績業での機械化が著しく、蒸気馬力数については繊維工業中の1879年45.2%, 1884年34.1%, 1893年36.9%, 1900年22.4%を占めていた。Puś, *op. cit.*, s. 38—40, 42.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第13表 繊維工業労働者の構成 (1865年)

		蒸気機関 設置工場	その他の工場		計
			17人以上雇用	17人未満雇用	
工場数		44	86	1,222	1,352
雇 用 数 (人)	管 理 職	103	20	—	123
	男子労働者	2,318	1,658	4,001	7,977
	女子労働者	1,292	408	1,625	3,325
	若年労働者	1,144	590	1,133	2,867
	計	4,857	2,676	6,759	14,292

出所：Łukasiewicz, *op. cit.*, 127.

馬力と著しく増加した¹⁾。また蒸気機関の利用は、工場労働者の構成にも変化を引き起こした。第13表は1865年の蒸気機関を所有する工場とその他の工場との労働者構成の違いを示したものである²⁾。注目に値するのは、蒸気機関設置工場における女子労働者と若年労働者（児童）の比率の高さであろう。管理職を男子として計算すると、繊維工業全体では女子労働者の割合は23%、若年労働者を加えると43%、17人以上雇用の工場ではそれぞれ15%と37%であるのに対して、蒸気機関を所有する工場の場合には女子27%、若年労働者を加えて50%になる。17人未満を雇用する工場は平均5～6人を使用するおそらく家族的性格の強い小規模工場であり、それ故に女子の比率が高いのであろう。他方、平均100人以上を雇用する蒸気機関設置工場でこれだけ女子や若年労働者が多いということは、機械化の進展に伴って未熟練労働者が大量に動員され始めたことを示すと考えられる³⁾。

さて、このように原動力として蒸気機関が広く用いられる一方で、繊維製品

- 1) *Ibid.*, s. 13. 中でも綿工業労働者の1人当り馬力数が1900年で1.04馬力と最も大きく、羊毛工業では0.65馬力であった。
- 2) 表中の雇用労働者総数は、前出の第1表の労働者数の推移と比較するとあまりに少なすぎるようであるが、その理由はここでは特定しえない。
- 3) ちなみに1910年にもなると、たとえばウッジ市の繊維工業労働者のうち女子の比率は45%に達する (K. Bajer, *Premysł włókienniczy na ziemiach polskich*, Łódź 1957, s. 140)。繊維工場機械化の結果に他ならない。

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

の生産工程そのものの機械化もまた急速に進んだ。その過程は部内によってまちまちである。最も早く機械化の進んだのは綿紡績業で、その結果紡錘数は、1866年75,000、1876年385,450、1882年467,582、1886年615,354、1899年936,956、1900年1,043,905錘と24年間に14倍に増加した¹⁾。1870年代には当時最新式であったミュール精紡機が導入されたが、やがて19世紀の末にはリング機に取って代²⁾られた。やや遅れて綿織物業で大企業を中心に機械化が進んだ。1860年代にはまだ大部分が手織機であったが、その後機械織機が次第に普及し、その数は1866年200台、1875年4,417台、1879年6,000台、1886年10,572台、1890年10,760台、1900年24,549台と急増³⁾している。羊毛工業ではやや近代化が遅れ、紡績業では1880年代になってもまだ機械紡績は部分的にしか行なわれていなかった。それでも1886年から1900年の間に紡錘数は215,000から516,317錘へと2倍以上に増えた⁴⁾。毛織物業では1860年代半ばに最初の機械織機が設置され、1870年代末に特に機械化が進んだ。機械織機数は1870年から1900年の間に614から9,802台へと大きく増加している⁵⁾。麻工業においては前述のジラルドゥッフの工場⁶⁾で、1870年から1901年の間に紡錘数で3倍(8,920→26,648錘)、機械織機数で3.5倍(510→1,800台)の増加が見られた。

それらの機械類はほとんどがイギリスから輸入された。1860年代の末にはイギリス製の機械類が、ポーランド王国の西欧からの輸入品目中の第1位を占め、また1898—1900年の間、王国を含むロシアがイギリス機械の輸入国のトップの地位にあ⁷⁾った。つまり他の後発国と同様に、ポーランド王国の繊維工業におい

1) Puś, *op. cit.*, s. 14.

2) ウッジ繊維工業地帯の位置するピョトゥルクフ州における紡錘数中のリングの割合は、1890年の36.6%から1899年には51%となって半数を越えている。Puś, *op. cit.*, s. 16.

3) *Ibid.*, s. 15.

4) *Ibid.*, s. 15.

5) *Ibid.*, s. 15.

6) *Ibid.*, s. 15.

7) *Ibid.*, s. 16.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

でも先進国からの輸入機械による機械化が進行したのである。¹⁾

VI

次に繊維工業の発展と密接に結びつく生産の集中について見てみよう。前述の数回にわたる不況期を通じて、中小企業を中心に多くの企業が淘汰され企業の集中・合併と大規模化が進行した。その結果第14表に見られるように、1879年から1900年の間に1工場当りの生産額と労働者数は3倍に拡大した。繊維工業全体について雇用数による規模別にその生産額等の構造を示すと第15表のようになる。まず工場数について見ると、1879年から1900年の間に小規模工場（雇用数5—15人）が次第に淘汰されてゆく一方で、大工場（雇用数501人以上）の数が増え、生産額においても（43.8%→66.4%）労働者数においても（50.3%→63.9%）その大工場へ生産が集中してゆくのがわかる。表にはないが、1913年にはこの大工場が工場数の8.7%、生産額の65.1%、労働者数の62.7%を占めて一層集中度を増している。²⁾ 他方中規模工場（雇用数16—500人）はむしろ工場数は倍増しているのに（209→432工場）、生産額（49.9%→33.3%）と労働者数（41.8%→35.4%）の割合はそれぞれ低下している。ただし1913年にはさらに工場が増え（573工場）、生産額（34.9%）と労働者数（36.9%）の割合は若干上昇した。³⁾ 以上のことから、王国繊維工業の発展が大企業の成長と深く関連していたことは明白であり、特に1,000人を越える労働者を雇用する巨大企業はその数こそ少ないものの（1900年3.5%、1913年4.8%）、生産額（1900年49.8%、1913年50.1%）と労働者数（1900年49.0%、1913年52.0%）において決定的な意味をもつようになっていった。⁴⁾

同じように綿・羊毛・麻の各部門について雇用規模別の生産構造を示すと第

1) 一方でこの事実がポーランドの重工業、特に機械工業の発展を阻害したとの見方もある。Kula, *op. cit.*, s. 100.

2) Badziak, *op. cit.*, s. 58.

3) *Ibid.*, s. 58.

4) 1913年のデータは *ibid.*, s. 58.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第14表 1工場当りの生産額と労働者

年	生産額(ルーブル)	労働者(人)
1879	104,592.7	59
1884	198,573.8	108
1893	188,504.6	123
1900	320,771.0	200

出所：Puś, *op. cit.*, s. 63.

16表・表17表・第18表のようになる。第16表からわかるように、綿工業においては比較的早くから巨大工場のウェイトが大きく、しかもますますそこへの生産の集中が進んだ。1913年については501人以上雇用規模での分類しかできないが、その大工場が工場数の21.3%、生産額の84.7%、労働者の84.8%を占めている。ただし綿工業1工場当りの労働者数は1900年の2,776人から1913年には2,283人へと減少し、綿工業全体としての集中化傾向はややにぶっていた¹⁾。早くから巨大工場のウェイトが高いのは、綿紡績において群を抜いた巨大企業が存在していたためで、それらの大企業はその後王国綿工業の特色である紡績・織布・仕上げ等の多部門を有するコンビナート企業としてさらに発展した²⁾。羊毛工業では綿工業ほどの大企業への集中は見られないが(第17表)、1890年代以降は毛織物工場の拡大や外国資本による大規模梳毛紡績工場の建設などによって大工場の集中化が見られた³⁾。1913年には501人以上雇用の大工場が工場数の7.6%、生産額の57.0%、労働者の50.7%を占めていた⁴⁾。麻工業ではやはりジラルドゥフの巨大企業の独占的な地位が際立っている(第18表)。1913年には501人以上を雇用する工場に生産額の95.2%、労働者の97.5%が集中していた⁵⁾。

1) *Ibid.*, s. 61—62.2) Puś, *op. cit.*, s. 38, 44—45.3) *Ibid.*, s. 45—52.4) Badziak, *op. cit.*, s. 63.5) *Ibid.*, s. 65.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第15表 ポーランド王国繊維工業の規模別構造

雇用数 (人)	年	工場数		生産額		労働者	
			%	(ルーブル)	%	(人)	%
5—10	1879	192	40.7	1,812,500	3.6	1,381	4.9
	1884	96	23.7	1,171,000	1.4	702	1.6
	1893	105	19.7	1,060,000	1.0	780	1.1
	1900	33	5.9	306,700	0.1	253	0.2
11—15	1879	64	13.6	1,359,100	2.7	840	3.0
	1884	57	14.1	1,164,000	1.4	736	1.7
	1893	75	14.1	1,157,000	1.1	1,031	1.5
	1900	47	8.4	514,100	0.2	619	0.5
16—50	1879	126	26.7	7,204,400	14.6	2,700	9.7
	1884	146	36.0	6,647,000	8.3	4,245	9.6
	1893	156	29.3	7,871,000	7.8	4,810	7.3
	1900	220	39.6	7,288,800	4.0	6,788	6.0
51—100	1879	49	10.4	5,135,000	10.5	2,728	9.8
	1884	41	10.1	3,543,000	4.3	2,945	6.7
	1893	90	16.9	9,033,000	9.0	5,683	9.0
	1900	100	18.0	9,300,000	5.2	7,407	6.7
101—200	1879	22	4.6	7,255,400	14.7	3,181	11.5
	1884	27	6.6	7,014,000	8.7	3,857	8.7
	1893	43	8.1	7,534,000	7.4	5,772	8.9
	1900	64	11.6	14,983,400	8.5	9,619	8.7
201—500	1879	12	2.6	4,979,400	10.1	3,034	10.8
	1884	23	5.6	16,306,000	20.3	6,240	10.3
	1893	32	6.0	13,247,000	13.2	9,652	14.8
	1900	48	8.7	27,950,700	15.6	15,588	14.0
501—1,000	1879	3	0.6	5,377,000	10.9	1,993	7.1
	1884	7	1.7	17,813,000	22.1	4,751	10.9
	1893	19	3.5	23,832,000	23.8	12,362	18.9
	1900	24	4.3	29,621,400	16.6	16,615	14.9
1,001以上	1879	4	0.8	16,245,000	32.9	12,033	43.2
	1884	9	2.2	26,963,000	33.5	20,376	46.5
	1893	13	2.4	36,739,000	36.7	25,213	38.5
	1900	20	3.5	88,383,600	49.8	54,409	49.0
計	1879	472	100.0	49,367,800	100.0	27,890	100.0
	1884	406	100.0	80,621,000	100.0	43,852	100.0
	1893	533	100.0	100,473,000	100.0	65,503	100.0
	1900	556	100.0	178,348,700	100.0	111,298	100.0

出所：Puś, *op. cit.*, s. 33.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第16表 綿工業の規模別構造

雇用数 (人)	年	工場数		生産額		労働者	
			%	(ルーブル)	%	(人)	%
5—10	1879	118	62.8	640,300	3.3	802	8.2
	1884	25	29.1	156,000	0.4	166	0.9
	1893	15	21.8	96,000	0.2	94	0.4
	1900	2	1.6	9,800	—	19	—
11—15	1879	27	14.4	277,500	1.4	361	3.7
	1884	12	14.0	177,000	0.4	160	0.9
	1893	7	10.2	70,000	0.1	80	0.3
	1900	8	6.7	67,200	0.1	102	0.2
16—50	1879	23	12.3	802,500	4.1	467	4.8
	1884	22	25.6	666,000	1.6	636	3.7
	1893	12	17.4	344,000	0.9	392	1.8
	1900	37	31.1	1,111,800	1.7	1,218	1.6
51—100	1879	7	3.8	522,000	2.6	476	4.9
	1884	4	4.6	494,000	1.1	259	1.5
	1893	7	10.2	770,000	2.1	524	2.5
	1900	24	20.2	1,380,000	2.2	1,634	3.6
101—200	1879	5	2.6	2,462,000	12.7	709	7.3
	1884	5	5.8	882,000	2.1	699	4.1
	1893	6	8.6	1,361,000	3.8	931	4.4
	1900	9	7.6	2,729,400	4.4	1,375	2.9
201—500	1879	5	2.6	3,262,000	16.9	1,508	15.6
	1884	7	8.2	5,949,000	13.9	1,703	10.0
	1893	6	8.6	2,282,000	6.3	2,101	9.8
	1900	17	14.3	8,579,200	13.7	5,832	12.5
501—1,000	1879	1	0.5	1,526,000	7.9	700	7.2
	1884	5	5.8	15,733,000	36.8	3,269	19.2
	1893	8	11.6	10,618,000	29.2	3,772	17.6
	1900	8	6.7	7,867,800	12.6	5,354	11.5
1,001以上	1879	2	1.0	9,902,000	51.1	4,691	48.3
	1884	6	6.9	18,745,000	43.8	10,188	59.7
	1893	8	11.6	20,881,000	57.4	13,550	63.2
	1900	14	11.8	40,913,300	65.3	31,189	66.8
計	1879	188	100.0	19,394,300	100.0	9,714	100.0
	1884	86	100.0	42,802,000	100.0	17,080	100.0
	1893	69	100.0	36,422,000	100.0	21,444	100.0
	1900	119	100.0	62,658,500	100.0	46,723	100.0

出所：Puś, *op. cit.*, s. 114.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第17表 羊毛工業の規模別構造

雇用数 (人)	年	工場数		生産額		労働者	
			%	(ルーブル)	%	(人)	%
5—10	1879	64	26.6	1,101,055	4.2	497	4.3
	1884	56	25.3	917,000	3.2	424	2.9
	1893	59	20.8	717,000	1.7	459	1.9
	1900	9	3.3	62,100	0.09	66	0.1
11—15	1879	34	14.1	1,046,225	4.0	342	3.0
	1884	28	12.7	894,000	3.1	370	2.5
	1893	43	15.1	741,000	1.7	610	2.3
	1900	24	9.1	256,900	0.31	315	0.9
16—50	1879	85	35.3	6,663,913	25.8	2,382	21.0
	1884	88	39.6	4,828,000	17.2	2,528	17.8
	1893	87	30.6	6,211,000	14.9	2,866	11.2
	1900	122	16.1	3,542,200	5.1	3,935	11.4
51—100	1879	34	14.1	4,650,550	17.9	2,277	20.1
	1884	21	9.4	2,234,000	7.9	1,484	10.4
	1893	51	17.9	5,480,000	13.2	3,187	12.5
	1900	42	15.9	4,072,300	5.9	2,941	8.4
101—200	1879	15	6.2	4,241,400	16.4	2,136	18.8
	1884	12	5.4	3,388,000	12.1	1,755	12.4
	1893	17	5.9	3,675,000	8.8	2,321	9.1
	1900	32	12.1	7,561,900	11.1	4,631	13.4
201—500	1879	7	2.9	4,155,100	16.1	2,303	20.3
	1884	13	5.8	9,093,000	32.3	3,593	25.2
	1893	16	5.6	6,604,000	16.0	4,867	19.2
	1900	19	7.1	10,651,800	15.7	5,705	16.5
501—1,000	1879	2	0.8	4,057,000	15.6	1,430	12.5
	1884	2	0.9	2,080,000	7.4	1,482	10.3
	1893	9	3.1	12,132,000	29.3	7,254	28.5
	1900	10	3.8	17,988,700	26.4	7,381	21.4
1,001以上	1879	—	—	—	—	—	—
	1884	2	0.9	4,718,000	16.8	2,628	18.5
	1893	3	1.0	5,950,000	14.4	3,893	15.3
	1900	7	2.6	24,098,000	35.4	9,665	27.9
計	1879	241	100.0	25,915,245	100.0	11,367	100.0
	1884	222	100.0	28,152,000	100.0	14,264	100.0
	1893	285	100.0	41,510,000	100.0	25,457	100.0
	1900	265	100.0	68,233,900	100.0	34,639	100.0

出所：Puś, *op. cit.*, s. 119.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第18表 麻工業の規模別構造

雇用数 (人)	年	工場数		生産額		労働者*	
			%	(ルーブル)	%	(人)	%
5—10	1879	1	25.0	5,400	0.3	10	0.2
	1884	—	—	—	—	—	—
	1893	—	—	—	—	—	—
	1900	1	12.5	4,100	0.0	9	0.1
11—15	1879	—	—	—	—	—	—
	1884	—	—	—	—	—	—
	1893	—	—	—	—	—	—
	1900	—	—	—	—	—	—
16—50	1879	—	—	—	—	—	—
	1884	2	50.0	55,000	1.5	66	0.9
	1893	1	20.0	20,000	0.2	24	0.2
	1900	1	12.5	7,500	0.1	17	0.1
51—100	1879	1	25.0	60,000	2.6	85	1.6
	1884	—	—	—	—	—	—
	1893	2	40.0	140,000	1.9	147	1.7
	1900	—	—	—	—	—	—
101—200	1879	—	—	—	—	—	—
	1884	1	25.0	180,000	4.8	121	1.6
	1893	—	—	—	—	—	—
	1900	—	—	—	—	—	—
201—500	1879	1	25.0	199,300	8.8	212	3.9
	1884	—	—	—	—	—	—
	1893	—	—	—	—	—	—
	1900	—	—	—	—	—	—
501—1,000	1879	—	—	—	—	—	—
	1884	—	—	—	—	—	—
	1893	1	20.0	668,000	9.1	708	6.2
	1900	3	37.5	2,481,400	21.8	1,858	14.9
1,001以上	1879	1	25.0	2,000,000	88.3	5,000	94.3
	1884	1	25.0	3,500,000	93.7	7,560	97.5
	1893	1	20.0	6,517,000	88.8	7,700	89.9
	1900	2	25.0	8,848,300	77.7	10,442	93.9
計	1879	4	100.0	2,264,700	100.0	5,307	100.0
	1884	4	100.0	3,735,000	100.0	7,747	100.0
	1893	5	100.0	7,345,000	100.0	8,649	100.0
	1900	8	100.0	11,391,300	100.0	12,448	100.0

出所：Puś, *op. cit.*, s. 120.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

VII

以上のような繊維企業の巨大化・集中化は、一方では企業の株式会社化の過程でもあった。ポーランド王国においては特殊な免許制によって株式会社設立が認可され、その手続きが極めて複雑で手間のかかるものであったために、当初王国の企業は専ら個人企業であった。しかし工場の大規模化が進むにつれて、相続手続の簡便さ、企業倒産時の個人財産の保護、信用取引の簡略化、積立金・減価償却としての一部利益の隠匿、当時不足していた長期信用に代わる株式発行による設備投資金の確保等の株式会社制度のもつ有利さが注目されることとなり、1870年以降多くの工業分野で株式会社が普及していった¹⁾。王国工業の中で最も早く株式会社が設立されたのは製糖業で(1872年)、次いで機械工業(1873年)・鉱山(1874年)・製鉄業(1875年)にも株式会社が生まれた。繊維工業においては1877年に綿工業で最初の株式会社が設立され、その後1980年代末から90年代にかけて株式会社が広がっていった²⁾。

第19表は繊維工業における株式会社の増加を示している。1878年から1914年の間に資本金で55倍に増加しているが、特に1890年代の株式会社設立が目覚しく、1900年代の初めの時期にはほとんど増加が見られなかった。その株式会社が繊維工業に占める比重は第20表の通りである。そこに明らかなように1879年には個人企業が圧倒的な地位を占めていたが、次等にその重要性は低下し、1890年代には代って株式会社が生産や雇用数の過半数を占めるようになった。今や繊維生産の主要な担い手は規模の大きな株式会社に完全に移ったのである。なお合資会社も少しずつではあるがその重要性を高めている。

また第21表は繊維工業各部門における株式会社の地位を示したものであるが、見られる通り1900年の綿工業と麻工業においてその生産のほとんどを株式会社が担っている。綿工業は最も株式会社化の進んだ繊維部門であり、麻工業

1) Puś, *op. cit.*, s. 70—71.

2) *Ibid.*, s. 71, *Historia Polski*, III - I, s. 398—399.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第19表 繊維工業における株式会社

年	株式会社数	資本金(千ルーブル)	年	株式会社数	資本金(千ルーブル)
1878	1	2,250	1902	38	82,031
1885	3	20,250	1903	40	83,531
1888	5	24,175	1904	38	80,531
1892	11	37,875	1905	38	80,531
1893	12	39,515	1906	38	80,531
1894	15	40,838	1907	38	81,531
1895	16	41,638	1908	40	92,891
1896	16	41,638	1909	41	98,396
1897	19	45,038	1910	42	101,241
1898	27	60,875	1911	43	105,972
1899	33	68,375	1912	47	111,967
1900	39	79,132	1913	52	120,023
1901	41	84,240	1914	57	124,823

出所：1878—1900年は Puś, *op. cit.*, s. 75, 1901—1914年は Badziak, *op. cit.*, s. 80 による。

第20表 企業形態別生産構造

		1879年		1884年		1893年		1900年	
工場数	個人企業	449	95.2%	378	93.2%	467	87.7%	413	74.2%
	合資会社	22	4.6	25	6.1	51	9.5	104	18.8
	株式会社	1	0.2	3	0.7	15	2.8	39	7.0
	計	472	100.0	406	100.0	533	100.0	556	100.0
生産額	個人企業	44,262.6	89.7	56,199	69.8	33,329	33.2	49,264.3	27.6
	合資会社	3,605.2	7.3	6,681	8.2	12,751	12.7	24,650.7	13.9
	株式会社	1,500.0	3.0	17,741	22.0	54,393	54.1	104,433.7	58.5
	計	49,367.8	100.0	80,621	100.0	100,473	100.0	178,348.7	100.0
労働者	個人企業	24,820	89.0	30,611	69.9	24,277	37.1	35,638	32.0
	合資会社	1,854	6.7	4,995	11.3	8,454	12.9	14,250	12.8
	株式会社	1,216	4.3	8,246	18.8	32,772	50.0	61,410	55.2
	計	27,890	100.0	43,852	100.0	65,503	100.0	111,298	100.0

生産額の単位は千ルーブル。

出所：Puś, *op. cit.*, s. 72.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

第21表 繊維工業各部門における株式会社 (1900年)

	工場数			生産額(千ルーブル)			労働者 (人)		
	総数	株式会社		総額	株式会社		総数	株式会社	
			%			%			%
綿	119	15	12.6	62,658.5	60,988.9	97.3	46,723	36,004	77.0
羊毛	265	13	4.9	68,233.9	28,193.0	41.3	34,639	10,630	30.6
麻	8	4	50.0	11,391.3	10,612.1	93.1	12,448	11,910	95.6
その他	164	7	4.2	36,065.0	4,538.7	12.5	17,488	2,857	16.3

出所：Puś, *op. cit.*, s. 74.

の場合にはジラルドゥフの独占的な株式会社の役割が大きい。一方羊毛工業においてはこの段階で株式会社がまだ決定的な地位を占めるには至っていない。なお繊維工業のこの合計39の株式会社は、王国全株式会社の中で企業数26%、資本金で39.3%を占めていた¹⁾。また大企業=株式会社であって、雇用数500を越える規模の繊維企業のうち株式会社は企業数で57% (1,000人を越える規模になると70%)、生産額で82% (同じく93%)、労働者数で81% (同じく89%)を占めている²⁾。最後に、第21表で示した1900年の繊維工業における株式会社の中で、外国資本によるもののウェイトをみると、まず企業数では39のうち10社、生産額では株式会社による計104,433,700ルーブルのうち13,207,900ルーブル (12.6%)、労働者数では61,437人のうちの6,573人 (10.7%) となっている³⁾。

VIII

以上、マクロ的なデータを用いることによって、ポーランド王国繊維工業発展の全体像の把握を試みた。資料の信頼性にやや問題を残しながらも、われわれは19世紀後半以降のその目覚ましい成長の成果と、それと深く関わる1870年代・80年代における技術革新=機械化、そして1880年代・90年代における株式

1) Puś, *op. cit.*, s. 74.2) *Ibid.*, s. 74.3) *Ibid.*, s. 78.

19世紀後半におけるポーランド王国繊維工業の発展

会社を中心とする生産の集中を知ることができた。ポーランド王国成立以来準備されつつあった客観的条件と主体的な努力は、19世紀の末にこのような繊維工業における工場制大工業の勝利となって実を結んだのであった。

しかし、ここに繊維工業発展期そのものの全体像はある程度把握しえたとしても、繊維工業成立期の分析とそれを結び合わせて理解する仕事が残されている。そのためにも、先に触れたように個別企業や企業家の成長を、それを取り巻く社会的・経済的諸条件と関連づけながら考察することが必要となる。成立期以来のその軌跡を明らかにすることによって初めて、われわれは本稿で示されたマクロ的な成果の内容と意味を理解しうるのである。

さらに行論中にも触れたように、王国繊維工業発展の要因をめぐっては多くの解明すべき問題点があり、それがポーランドにおける資本主義というものの理解に深く結びついている。様々な点において恵まれない条件の下にあったポーランド王国で、果していかにしてこのような発展が可能であったのだろうか。そしてそれがポーランド資本主義の特質とどう関連するのだろうか。それらを明らかにするためには、ロシア市場と王国国内市場の意義、ロシアの関税政策の役割、技術革新の評価、外国資本あるいは外国人企業家の位置づけ、農奴解放の社会的影響等についてさらに分析しなければならない。それらはすべて今後の課題である。